

環境整備について

- ・ゴミ箱については、医療用のものでなくても、廉価なものでも構わないので、蓋つきのもので、足で開閉できるものの方が良い。
- ・座席について、特にマスクの装着が難しい利用者の配置については十分距離をとり、向かい合わせにならない工夫をすること。着席するときの隣の利用者同士の距離は2 m空ける必要はなく、長机に1人ずつの距離間でよい。同じテーブルで利用者同士がすぐ隣に密接して座る場合に、その間にパーテーションを置くのであれば、利用者の間に足元まであるようなパーテーションを置くことが必要になる。
- ・カラオケをする場合は、時間を短めに設定するのがよい。また、自席で立って歌う場合、周囲の利用者に飛沫を飛ばしてしまう恐れがあるため、距離をもって歌うようにするとよい。可能であれば、他者に背を向けディスプレイに向かって歌うなどの工夫をするとよい。

換気について

- ・換気が重要ではあるが、常に開放している必要はなく、短時間でも最低2か所を開け、空気の入り口と出口を確保すること。
 - ・各部屋から共用スペースに空気が流れ込むような換気はよくない。各部屋から外に空気が出ていくような換気が良い。
 - ・空気清浄機はあまり意味がない。空気を流すという点で、設置場所に関わらずサーキュレーターのようなものの方が有効的ある。
- オゾンによる除菌の機械について、ないよりはある方がよい。しかし、数十万個のウイルスを数万個に減らしたからといって、安全になるわけではない。機械を設置したから安心と思い、換気をしなくなるのが危ない。機械の活用とは別に、換気も重要である。
- ・飛沫として撒かれたウイルスは、机や床に落ちて上がってくることはないが、エアロゾルを吸ったり目についたりする可能性はある。

衛生管理について

- ・消毒用アルコールについては基本的に詰め替えをせず、販売されている容器のまま使用の方が、効果が継続する。
- ・PPEについては、不測の事態に対応するためにも、通常使用する1か月以上分のストックをしておくとうい。
- ・ハイターは光に弱いいため、窓際に置く場合は遮光して保管する必要がある。

〈介助中〉

- ・口腔ケアや食事介助、入浴介助等で密着するときはフェイスシールドがあるとよい。口の部分だけのものは効果が薄いとのこと。最低限マスクをし、手指消毒をして介助を行うことで、万が一職員が感染していた場合に、利用者が濃厚接触者となることを防ぐことができる。陽性者を出さないことが難しくても、増やさないことに繋がり、対外的にも適切な対応をとっていたことが証明できる。
- ・フェイスシールドについては、再利用が可能。職員個人に配布し、アルコールで消毒して使用すれば問題ない。
- ・エプロンだと袖にウイルスが付着するため、ガウンの方がなお良い。ガウンは部屋の外で着て介助に入り、部屋の中で脱ぐようにする必要がある。

〈訪問時〉

- ・靴を脱ぐ場合は、フットカバーや靴下では外す際に手指周辺を汚してしまうため、訪問時にすぐに消毒や拭くことができるスリッパを使用するとよい。また、ウイルスを持っている可能性のある利用者の家に訪問した際は、衣服はすべて着替えたほうがよい。

健康管理について

- ・職員の体調をこまめに確認し、本人の体調不良に早期に気づき、対応できるようにしておくことが大切である。入所施設の場合、感染経路は外部からの持ち込みしか考えられないので、いかに持ちこまないかが重要。
- ・何かあった時に、このように対応していたと明示できるような対応を日頃から努めていくことが必要である。入館者の管理や、とっている対応を記録に残し、チェックシート等で随時確認することも重要。

陽性者が出たときの対応について

・職員から陽性者が出た場合、建物全体を消毒しようとする必要はない。その職員が日常的に触れていた場所(エレベーターのボタンなど)を消毒することが重要である。

・利用者から陽性者が出た場合、その利用者の部屋全体あちらこちらを消毒する必要はなく、日常的に触れていた場所を消毒することが重要。1週間その部屋を全く使用することなく放置していれば、ウイルスは消える。

・厚労省作成の手引き等を基本にして取り組めばよい。

<発熱した人が1～2人のとき>

・基本的には疑いがあるなら検査をすべき。早めの対応が大事。

・マスクなし、1m以内で15分話していると濃厚接触者としてみなす。

・感染者がでたとしても、職員がどこまで接したか距離ほどの程度なのか等で判断。あとはガウンを一回一回使用して、使ったら捨てることが一番。そのため、在庫を確認しておくことも必要。